

2021年1月3日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「福音の初め」

聖書：マルコによる福音書1:1～15

マルコ福音書が書かれた時代には、皇帝崇拜の強要が背景にある。歴代の皇帝は自らを「神の子」と呼ぶことを民に強いた。その時代に「神の子イエス・キリストの福音の初め」と記すことがどんなに危険なことか。

バプテスマのヨハネはイエスの事をこう宣言する。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない」とは、私の王という宣言であり、また「わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる」とは、イエスを「神」であるという宣言である。さらに「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた」とあるのは、イエスを天からの「神の子」宣言として記している。

この神の子宣言を受けたイエスは、どのような歩みをされて行くのか……。イエスは荒れ野に行くが(12,13 節)、「荒れ野」とは本来人間が住むべき場所ではない。イエスは荒れ野にいる時、野獣と一緒にいたが、天使たちが仕えていたとあって、ここは天使たちが危険な野獣からイエスを守っていたという意味ではない。ここは、野獣とさえ平和に過ごすイエスの姿と天使たちの給仕を記す。マルコの誘惑とは、荒れ野で野獣から危害を受けることもなく、食べ物心配をすることもなく、極めて平和に不自由なく過ごすこと。すなわち世俗と離れ安泰に生きること。それがマルコのいう誘惑である。

ではイエスはその誘惑に対しどうしたのか？ 「ヨハネが捕らえられたのち、イエスはガリラヤへ」行くのである。ガリラヤという場所は、イエスが生まれ育った場所であると共にユダヤにおいて最も差別された地域とも言われる場所。イエスは安泰な平和な場所から抜け出し、命が脅かされる人々の只中に身を置かれ、共に歩む生き方を見せられた。

私たちは、荒れ野のような社会の中で、何不自由なく安泰に暮らす者だろうか。この世の教会はどうか。「ハレルヤ……」と賛美し、安泰に信仰生活を送る者だろうか。それではイエスの宣言は聞こえない。私たちの社会が荒れ野である事に気づき、そこに身を置き、もがくものだろうか。その時、イエスの宣言が聞こえてくる。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と。この宣言は、慰め、励まし、希望、勇気に満ち溢れている。

2021 年は、ますます厳しい状況に置かれることは予測できる。ゆえに私たちは、「福音の初め」である「神の子イエス・キリスト」の宣言を持って、歩ませて頂こう。皆様と手を携えて。(神谷)